

# ロマン・ロランとフランス高等師範学校 —『ユルム街の僧院』をとおして—

向 井 一 夫

## I. はじめに

フランスの文豪ロマン・ロランの作品に『ユルム街の僧院』という日記がある。ユルム街の僧院とは、フランスの高等師範学校 (Ecole Normale Supérieure) のことを指すもので、パリのユルム街に位置し、僧院に似た厳格な規律を持つ寄宿制学校であることから、こう名付けられており、ロラン自身、この学校のことを「ユルム街のギリシャ＝ラテン精神の修道院」とも称している。この作品は、ロラン自身が19世紀末に在学した高等師範学校生徒時代、つまり青春時代の日記である。

そもそも高等師範学校とは、フランス革命によって廃棄された中世以来の大学に代わる高等教育機関の一つとして、革命政府国民公会によって、1795年に設立されたエコール・ノルマルを原型としており、創設の目的は、フランス全土に啓蒙思想と革命思想を普及させる教員の養成にあった。しかし、設立直後に閉鎖され、ナポレオンによって1808年にパンシヨナ・ノルマルとして復活する。それは、全寮制の師範学校であり、その定員は、300人以内とされた。生徒は、17歳以上であることを条件に、視学官による審査と選抜試験にもとづき、リセから採用された。これらの生徒は、少なくとも10年以上、教員団に奉職することが義務づけられる<sup>1)</sup>。1845年、現在の名称であるエコール・ノルマル・シュペリウール (高等師範学校) と改名され、現在に至っている。ノルマリアン (高等師範学校生徒、卒業生) は、公立中等学校教員団のなかの「貴族」的存在となり、第三共和政下の教育に対する社会的認識の高まりとともに、教授養成のための学校という役割ばかりでなく、様々な多様な分野のエリートを輩出することになる。ノルマリアンは、科学研究、文学、大学において重要な地位を得たばかりではなく、政界、官界、ジャーナリズムにも進出していた。

ロマン・ロランが、高等師範学校に入学を果たしたのは、1886年のことである。以下においては、この学校の黄金期ともいえる時期に学校生活を送ったロランをとおして、当時の高等師範学校の状況を素描してみたい。その際、ノルマリアンとしてのロランの当時の日記『ユルム街の僧院』<sup>2)</sup> とともに、晩年、彼が半生を振り返って綴った『回想記』<sup>3)</sup>、彼の内面の自伝である『内面の旅路』<sup>4)</sup> をも検討の素材とする。これらを通して、文学者としてのロランではなく、ノルマリアン、高等師範学校卒の教員としての彼の軌跡を抽出してみたい。しかし、その中に、文学に対する彼の思い、文学者としての彼の苦悩が、当時から垣間みられるのは興味深いところである。

## II. ロマン・ロランと高等師範学校入学

1886年7月、ロマン・ロランは三度目の挑戦で、高等師範学校入学を果たす。彼の日記によれば、7月31日の入学者は、24名であり、その成績順に記されている。コラルドー（ルイ・ル・グラン）、バルト（ルイ・ル・グラン）、シュアレス（ルイ・ル・グラン）、ド・リデル、ミル（ルイ・ル・グラン）、J. ゲイ（ルイ・ル・グラン）、メリナン（アンリ四世）、ゴークレル（ルイ・ル・グラン）、ベヴォット（スタニスラス）に次いでロマン・ロランは、第10位で入学を果たしている（『ユルム街の僧院』27頁）。括弧内に記されているのは、出身リセであり、ロランの出身校であるリセ、ルイ・ル・グランがその上位を占めている。24名の合格者のなかでも、群を抜いて多いのは、ルイ・ル・グラン出身者であり、その数は15名に達し、アンリ四世、スタニスラスがそれぞれ2名、記入されていないのが5名であった。当時、あるいは現在も、高等師範学校、理工科大学校などの難関グランゼコールに入学を果たすには、大学入学資格だけではなく、コンクールと呼ばれる競争試験を突破しなければならなかった。旧来の大学の学部が大学入学資格があれば入学を認められるのに対して、高等師範学校への入学は、限られた定員枠のなかに入るための壮絶な競争を経なければならなかった。その難関さは、同じ時期に、ロランの故郷であるクラムシーの中学の競争相手であったボワドーが、理工科大学校に入学を果たすが、「クラムシーの街の壁に、中学校の大きな広告ポスターを見たが、それにボワドーとぼくとの入学が謳われている」（『ユルム街の僧院』28頁）ほどの名誉となったことが物語っている。

ロラン自身、クラムシー中学校（現在はロマン・ロラン中学校）に在学中に、生まれ故郷を離れて、パリに移ったが、それは、パリのグランゼコール入学を考えての、母親の強い希望であったとされる。それというのも、グランゼコールに入るためには、パリでの受験準備が大きな位置を占めていた。とくに、その中でも名門とされるリセの特別学級での1～2年間の受験勉強を求められた。

高等師範学校をめざす学業優秀な生徒は、コンクールというもっとも厳しい競争試験に合格しなければならない。ルイ・ル・グラン、アンリ四世などのパリのリセが、とりわけ高等師範文科入学の受験準備をほぼ独占していた。そのため、パリ、もしくは重要なリセを擁する都市に居住していない場合には、その生徒は、家を離れ、大規模のリセ、その多くはパリにあるリセの一つに寮生として、そこでのスパルタ的な厳格な生活に耐え、勉学に励まなければならなかった<sup>5)</sup>。リセの生活に耐え、バカロレア試験（大学入学資格試験）に合格すると、通常は、リセに付設されるグランゼコール準備のための特別学級（文科系の特別学級をカーニュ、理科系のそれをトゥプという）に登録し、厳しい受験勉強を強いられる<sup>6)</sup>。

さて、ロランの場合も、故郷ブルゴーニュのクラムシーを離れて、パリでの受験準備をするが、彼の場合は家族ともどもパリに引っ越してくる。後年、彼は次のように当時を振り返っている。「私の勉強の仕上げのために、クラムシーの町ではもはや足りなかった。しかし人生修業のために、私の父や祖父のときと同様に私を独りでパリへ遣ろうと母はせず

に、母は一家を挙げて私と共にパリに移る決心をした」（『内面の旅路』357-358頁）。そのため、公証人として確固たる地位をクラムシーで有していたロランの父は、「家庭生活と自由と自分の友人たちを断念してパリに移り、退屈なオフィスの生活を四十年つづけた」（『内面の旅路』318頁）。母方の祖父もまた、クラムシーを離れ、『書物の城』に別れを告げなければならなかった。しかし、祖父の場合には、「少しもしりごみをしなかった。……彼は、ソルボンヌ大学や科学博物館やコレジュ・ド・フランスや、いろいろの図書館へ行くことによって、勉強の熱意と歓喜とを一彼が二十歳のときに味わったことのあるその熱意と歓喜とを再び味わった」（『内面の旅路』327頁）からである。このように、ロランの母は、「全家族の運命を、かawaii少年の、まことに不安定な運命に結びつけ、それを中心にして決定したのであった。そこで全家族の者が、故郷と住み馴れた家とを見棄てて行かねばならぬことに」（同上）になった。

パリに移ったロランは、学業面でも、精神面でも大きな転機を迎えることになった。「地方生活での、快適な、いい社会的位置はパリではなくなった。精神の均衡がなくなり、勉強への信頼感がなくなった。のんびりとして古風な小都会の学校……から引き抜かれて」

「もうそこでは首席になることなど問題外だった」（『内面の旅路』359頁）。「そして私は滑稽なことに、二番か三番の席次から四十番目に下りながら、自分ではなぜそうなるのか合点が行かなかった」「しかし学校での混乱も、自分の内面生活にくらべれば何ものでもなかった」（『内面の旅路』361頁）と後年述べている。しかし、1883年に「サン・ルイ中学からルイ・ル・グラン高校に移って、エコール・ノルマルの入試準備をはじめた日から、私にとっては一切が変わった」（『回想記』17頁）。そして、彼は、それまで以上に音楽、文学に魅せられていったが、パリに移った最大の目標である高等師範学校の入試には二度不合格となる。その間の事情について、後年、次のように述べている。「ペルリオーズとベートーヴェンを好んでいた。それにシェイクスピアが加わって三幅対をなしていた。彼は王の中の王だった。－私は私の時間（私の血とってよいだろう）のいちばんよい部分を彼にささげたために、一八八四年の八月に、エコール・ノルマルの入試に落第した。……この新しい所有の陶醉は、私の心の中で、コルネイユとヴィクトール・ユゴーの光栄の優位にとって代った。……一八八五年五月二十二日の彼（ユゴーのこと、筆者注）の死はあまりにも強く私の心を覆えたので、入試の直前に、私はもはや彼のことしか考えなかった。そして一八八五年八月に、ふたたび、私はエコール・ノルマルへの入学に失敗した」（『回想記』21-22頁）。三度目の最後のチャンスに臨んで、「私はエコール入学を強行する義務によって机にしばりつけられている。エコールは私にパンを保証してくれるわけだ。－三年間の学寮生活は無料である－（私を育てるために両親が払っている重い犠牲の荷を早くおろさなければならぬ）－そして、卒業すれば教職が保証されている。試験に二度落第したので、もう一度しか受験できない。賭金に魅力は少ないが、勝たなければならぬ。いっさいを勝負にかける！」（『回想記』26頁）とその決意を語る。

さて、当時の高等師範学校の文科入学のためのコンクールであるが、まず、6日間連続の筆記試験がおこなわれる。これは6種の試験、すなわち、哲学（6時間）、ラテン語文法

(6時間)、ラテン語の仏訳(4時間)、フランス語のギリシア語訳(4時間)、歴史(6時間)、フランス語文法(6時間)からなる。試験において古典語の占める割合が高いという伝統は、ユルム街では依然として強かった<sup>7)</sup>。筆記試験に合格したものは、パリの高等師範学校で口頭試験を受ける。それは、候補者の態度、ふるまい、成熟度、人格を評価するものであったようだ。この他にも、当該学区長による教職に必要であるとされた本人の「道徳性」の証明書の提出が求められ、純粋な学業的優秀さだけではなく、候補者の品行と人格も、合格のための重大な要因であった<sup>8)</sup>。

### Ⅲ. ノルマリアンとしてのロマン・ロランー高等師範学校生活

1886年7月、三度目の入試にロランは合格し、高等師範学校に入学する。同年11月入学式がおこなわれるが、高等師範学校での第一学年は上級生による手荒い歓迎によって始まる。その様子をロランは以下のように日記に綴っている。「エコール・ノルマル・シュペリユールの、われわれの入学式をあげる。神殿へ一同そろってはいるために、夜の十時、新入生たちがカフェ・ヴァシエットに参集。行列を組んで、ルイ・ル・グラン、サント・バルブ、アンリ四世などの高等中学校の窓下で歓声をあげるはずだった。ところが元気が出なかった。悪ふざけに怖じけづいたのだ。寄宿舎の大階段の下で、上からひびくものすごいわめき声に迎えられる。二年生が三階の踊り場で待っていたのだ。われわれは膝まずかせられ、平伏させられる。寝台に横になると、マットの下にうつ伏せにされ、スプリングに鼻をつけさせられた」(『ユルム街の僧院』32頁)。「二年生から新入生へふるまう慣例のボンソ。新入生を酔わせておもしろがるのである。バルトが泥酔する」(『ユルム街の僧院』36頁)。

こうして始まった高等師範の寮生活であるが、時には、全校生が集合して、「きちんとした服装で、フロックコート、黒い服」で学長室へ行くこともあった。12月29日の彼の日記によれば、学長に対して、「三つの事項を要求する。一、土曜日から日曜日にかけ、劇場がおそくはねた場合には、外泊を許すこと。二、二年生に対し、校外のいかなる講座の聴講をも許すこと。三、われわれを指揮する士官たちにもっと礼儀を要求すること(学校で軍事教練があったからである)」(『ユルム街の僧院』48-49頁)とある。高等師範学校設立当初は、全寮制学校の生徒として、大変厳格な規律を強いられ、1815年までは外出も禁じられており、1826年に週一度、1836年にはようやく週二度の外出が認められるようになったが、外泊は禁じられていた。また、1869年になるまで、宗教的儀式への参加が義務づけられていた<sup>9)</sup>。ロランの在学していた19世紀末の高等師範学校は、創立初期ほどではなかったとはいえ、まだまだ厳格な寮生活が求められた。そうした生活を後に次のように回想している。

「エコール・ノルマルは、私がそこに入ったころには、旧制度一特権をもった閉門一の最後の日を生きていた。厳格な寄宿制度は、稀れに芝居を見に行くか日曜日の昼間の外出しか許していなかった。外部の学園の講義を補助的に聴講する許可も容易にあたえなかった。ユルム街の家は自給自足という嫉妬ぶかい誇りをもっていた。高尚な知識修道院という趣きをそなえていた。四角な長い廻廊があって、厳粛な庭と噴水とがあった。門番が門

を見張っていた。ラテン区の燃えたつ真中で、大多数のものはこの幽閉をいらいらしながら耐えていた」（『回想記』38頁）。しかしそこでの生活は「厳粛で陶酔的な知性の競技の30年で、精神は後見人の手をはたれて発見に邁進するので一学士試験や教授適格試験などの術学的な試験に反抗を覚えたが、1年生と3年生とはそれを受けなければならなかった……しかし2年生はなんと天国だろう！ 欲することを自由に考えればよかった」。また当時の学部での教育と比較して、「教育には窮屈なところはなにもなかった。教授たちは、……彼らの一番よいものを、率直に、大胆に、妥協しないで、公開講義の教授たちが大学で守らざるをえない用心ぶかい半濃淡（ぼかし）などすることなくあたえるのだった。というのは、他の大学では、聴く術を心得ない匿名の群衆の謎の反応を考慮に入れなければならないからである」（『回想記』39頁）と述べている。ここで大学と記されているのは、厳密には学部のことである。フランス革命によって大学が廃棄され、19世紀を通じて、フランスには高等教育機関としての大学がなかった。高等教育は、学部（文、理、法、医）とグランゼコールが担当したが、とくに、文学部、理学部は実質的には教育・研究機能をもっており、19世紀の後半にいたるまで両学部には、実際には学生がいなかった。両学部が果たした機能は、バカロレアとリサンスの審査が第一であったが、中等教員に必要なリサンスは、試験前夜に学生として登録すれば実際に学部に通うことなしに取得できるのであった。両学部のもう一つの機能は、上流社会の人々のために行われる公開講演であった。このような学部を改革する声は、1870年代以降高まり、大学の復活とともに、学部への真の教育、研究の導入が要求された。とくに人文学の分野では、文学部は十分な機能をもたず、高等師範学校がその分野での唯一の機関であった。ロランが観察していたのは、こうした高等教育改革が具体化してゆかんとする時期であった。高等師範学校は、人文学などの分野において大きな役割を果たしており、文学部と比較して、そこでは、実質的で厳しい勉学が求められ、コンフェランスと称するゼミ形式での授業も行われていた。それは、以下のロランの日記からも窺えよう。「オレ＝ラブリュヌ先生の部屋で、「哲学的著作によるキケロ論」をぼくがする。内容的にも形式的にも先生は大いに満足してくださる」（『ユルム街の僧院』60頁）。「今夜、オレ＝ラブリュヌ先生の部屋で、さかんな哲学ディスカッションをおこなったが、ぼくは大いに驚いた」（『ユルム街の僧院』65頁）。

第一学年の終わりが近づくと、ロランは自分の専攻を模索しだす。高等師範の文科の場合、当時、古典科、歴史科、哲学科、文法科に分かれていたが、彼は歴史科を選択する。

ロランは、なぜ、文学でも、哲学でもなく、歴史を専攻しようとしたのか。それを知る手がかりは、彼の回想のなかにある。「私はエコールの演習によって、文学批評は嫌いになった。私は入学したときに、たいていの仲間と同様に、文学、哲学、歴史の三つの科について、私の将来に躊躇した。私はどの科にも向いていた。というのは入学のときの私の文学作品はいちばん高点の一つであり、また哲学の教授オレ＝ラブリュヌは私に「色目をつかって」いたからである。歴史地理科は、大量の勉強を必要とする点で、三つの科のうちではいちばん魅力がなかった。それにもかかわらず私が選んだのはそれだった。哲学はその当時の大学では自由でなかった」「哲学者になるいちばんよいやり方は、私の魂を自由

に保つことであつた。……文学については、それはちがっていた。自由は決して不足していなかった。しかし深き真摯が欠けていた」（『回想記』40-41頁）。

当時の高等師範の歴史科は、ギロー、ガブリエル・モノー、ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュといった錚々たるメンバーによって構成されており、ロランは彼らから「真理の探究における厳密な義務」（『回想記』40頁）を学ぶことになる。

歴史学を専攻することに決めたロランは、第一年次の最後に、学士（リサンス）試験に臨む。その様子をロランは以下のように描写している。「学士試験を三日後にひかえ、準備は十分でないけれども、ロンシャン〔パリ西郊の有名な競馬場〕での閱兵式を見にゆく」（『ユルム街の僧院』157頁）。「文学の学士試験。ぼくはどうか合格した。が、シュアレス、ブシャール、およびルグラは落第したので、新学期にもう一度受けなおさなければならない。こんど失敗すると、彼らはエコールを退学させられるかもしれない」（『ユルム街の僧院』161頁）。

高等師範学校の3年間の教育課程が確定されたのは1856年のことである。すなわち、一年の終わりにリサンス、二年次は専門分野における学内での試験、三年次にはアグレガシオンの受験の準備を行うことが定められた。これは、第三共和政を通じて改訂されることがなかった。大学教授志望のノルマリアン学生は、通常、リセでの最初の教職就任中に博士論文を準備する<sup>10)</sup>。

高等師範での最初の関門である学士試験にパスしたロランは、研究テーマを考えなければならなかった。普仏戦争前後の19世紀後半のフランスに生まれた世代として、戦争そして死のことを絶えず念頭に置かざるをえない時代に生きた青年ロランが、もし生き延びるとすれば、歴史学のテーマに選ぶとしたのは、16世紀後半の宗教戦争であった。「ぼくが生きていれば、先ず書くのは次ぎのようなものだ。ぼくは『宗教戦争』を書くだろう。この時代を選んだのは、歴史および生についてのぼくの理解を現実化するためだ」（『ユルム街の僧院』200頁）。しかし、「ぼくはなお、歴史のなかに永く留まろうとは考えていない。

『宗教戦争』はたぶんこの領域での、ぼくの最初にして唯一の試みとなるだろう。ぼくには別のもっと大きな、ひそかに計画している諸作品がある」（『ユルム街の僧院』202頁）。彼の歴史に対する認識は、「史上の人物をよく理解し、よく描く唯一の方法、それは彼らを楽しむことだ。同情共感のない写実主義は、火のない焔のようなものである。その理由は簡単だ。すなわち、生けるものの原則は、自らを楽しむ、自らの十全な発展を期することであるからだ。したがって歴史家たる者は、彼がその魂を娶る人々のあらゆる自己愛で彼の信条をいっぱいにするだけの、至高の共感力をそなえていなければならぬ」（『ユルム街の僧院』188頁）という言葉のなかに表されている。

19世紀後半期という、ドイツ大学の影響を受けた、科学の時代、学問の科学化の時代を、生きていたロランは、以下のように日記で披瀝している。「歴史文法、すなわち最も科学的な歴史は、多くの優秀な人材を集めている。一ではぼくたち、シュアレスやぼくは、歴史をどんなふうにやろうと欲しているのか。原文批評という古い方法によって、あれこれと調べ、推論し、資料を分類しようというのではない。過去の文書・言葉・出来事をたっぷ

り咀嚼吸収し、それらをぼくたちの血肉とし、そして魂たちを聚り、新たにそれらの魂たちをとおして、人々が他人にも、時にはおのれ自身にも打ち明けることのない心事を洞察しようというのである。ぼくたちは、かつて存在した人々を、完全に再び生きようと欲しているのだ」（『ユルム街の僧院』209頁）と。

さて、この当時のロラン、生徒としてのロランの学業はどうであったろうか。1888年3月の日記に、学期冗談会という記述がある。これは、ペロー校長およびヴィグル・ド・ラブラーシュ副校長が、生徒の成績を読み上げる会のことであるが、「褒められたのはバルトとコラルドーだけ」で、ブリュヌティエール先生はロランに対して、それほどよい評価を下さなかったが、一方で、「モノー先生がぼくの二回にわたる討論を批評され、クラウディウスについてのぼくの研究を、かぎりなく褒めてくださる。ぼくが将来、よく精神を見抜く歴史家になるだろうといわれ、独自の風格をもっているとされた。ーヴィグル・ド・ラブラーシュ先生も同様なことを言われ、ぼくが地理の教授においても、とくに心理的な推論を好んでいることを、正しく指摘された」（『ユルム街の僧院』226頁）。

2年次の末ごろになると、そろそろロラン自身将来のことを真剣に考え出す。たとえば、1888年の6月の日記では、「シュアレスと、ぼくらの未来について語る。シュアレスはとてもためらいがちだ。教職にはつきたくないと言う。ぼくはそれに賛成した。」「けれどもぼくは現在、ぼく自身にとっての危険の上に、さらに家族の者に新しい犠牲の償いができるかどうかという危険を、なおつけ加えたいとは思わない。だから教職を受け入れなければならないだろう。ぼくは十年の義務年限にしばられている。ぼくはそれをきちんと果たすつもりだ。つまり卒業後七年、教師をすることになる。しかし一日たりともそれ以上はしない。」「三十歳でぼくは大学も歴史も捨てる。そして小説の第一作をだす」。教職にあり続けることは、「ぼくの意に介しないことだ。それではぼくの精神生活や魂の自由を失ってしまう。ぼくにとって魂の自由こそ、この世のなによりも貴重なものなのだ」（『ユルム街の僧院』242-243頁）と。後にこの決意について、「これらの誇り高い自信のいくつかを人生は裏切った。しかし、結局のところ、プログラムはほぼ満たされた。そして自由は救われた」と述べるロランであった（『回想記』51頁）。

そして、最後の難関であるアグレガシオン（高等・中等教員資格）が待ち受ける最終学年の3年次を迎える。アグレガシオンは、リセあるいは学部の教員ポストにつくための競争試験であった。それは、国家博士号と同じくらい高い資格認定であった。アグレジェ（アグレガシオン取得者）であるリセ教授は、そうでない同僚に較べて、より高度なコースを教え、教育負担が軽く、より高い給与をもらい、幅広く教員ポストを選択できた。そして、文科系の分野では、ノルマリアンがその地位を独占していた<sup>11)</sup>。「三日前からぼくにとっての最後の学年が始まっている。……教授資格試験などの準備をするのは嫌だ。ぼくはそれに落ちるかもしれない。また合格しようと、ぼくはそれを利用はしない。もうぼくには教授になれないのだ。」「ぼくには教授などを長くしていることは絶対にできない。問題は今年か来年に、大学と縁を切るかどうかを、はっきりさせることだ。もしぼく一人なら、すぐにも決められる。しかし家族の者のぼくに対する信頼や、家族へのぼくの愛情のため

に、そうすることができない」（『ユルム街の僧院』263-264頁）。後に、このアグレガシオンについて、「そのうちに、私はエコールの三学年の強制労働に処せられた。」「私は教授適格試験（アグレガシオン）の準備のくびきを負わなければならなかった。息もつまる思いで私はそれに負うた。『死の家の記録』の苦役囚たちのように、私はその仕事の辛さとそれが私にとって絶対的に無益なことに二重に苦しんだ。というのは、教授適格試験に及第しようとしまいと、私はそれを使用しない決心をしたからである。私は教師になることをもはや欲していなかった……私は大学と絶縁することに決めていた。エコールを出ると直ちにそれをやるか、それとも後年やるかどうか、問題はそれだけだった」（『回想記』56-57頁）。

また、この間、教員養成所であるという高等師範学校に必須の教育実習もロランは経験している。それは、彼の出身校で、1889年の4月2日から10日まで行われた。「ルイ・ル・グラン高等学校で多くの教育実習をする。一三十、四十、ないし七十の眼が自分に向けられるのを初めて見ても、なんの気もちもわかかなかった。こんなに無関心でいたことは以前にもないほどだ。一ただ疲れて味気なかった。というのはいつも眼を少年たちに向けていなければならなかったからだ」（『ユルム街の僧院』290-291頁）。

同年の7月に、彼はアグレガシオンの試験を受ける。「歴史科教授資格試験の筆記と口頭とのあいだで、ぼくは麻疹にかかった。一が幸いに軽かった。ぼくより重いのかかった妹が、ぼくにうつしたのだ。筆記試験の最後の日の夜に病気になった。試験をほんとうに嫌なものだと思ったので、心の底では、口頭試験に出られるように直ることを、自分で望んでいるのかいないのか、分からないような気もちだった。一でもぼくは直った」（『ユルム街の僧院』307頁）。ロランはこの歴史科の教授資格試験に、8位で合格した。歴史科の同期のノルマリアンで合格したのは三名だけであった。とくに彼の親友シュアレスが、筆記試験の段階で不合格となったことに対して、日記では、「シュアレスが歴史科教授資格の筆記試験に落ちた。彼の歴史についての能力も人物としての価値も、試験委員がじゅうぶん認めていたのに。……彼は大学に残ることも拒み、図書館とか博物館とかいう就職の口も拒んでいる。自分がなにを望んでいるかも知らず、生きることと自分を守ること以外には、なにも望んでいない」（『ユルム街の僧院』308頁）と記述している。文学部などと較べて、アグレガシオンに向けて準備するには、その時代でもっとも教育環境の良かった高等師範学校でさえ、これだけの不合格者を出すこの競争試験が、いかに厳しい受験準備を必要としたかは、「ぼくの試験については、もうなにも言うことはない。もう終わったのだ。ぼくの苦役も終わったのだ。一いまぼくが才能のある青年に忠告を与えるとすれば、それはこんな競争試験などけっして受けるな、ということだ。第一に、体力が要る（ぼくは危うく重い病気にかかるところだった）。それからとくに、愚鈍な精神、もしくは意志の断念が要る（ぼくの場合そうだった）。それはとてもつらいこと、もしくはとても軽蔑すべきことだ」（『ユルム街の僧院』311頁）というロランの言葉からも窺えよう。

アグレガシオンに合格したロランに対して、「ペロー先生はぼくにローマ学院〔留学〕を提供してくださった。じつは三年前から先生は、バルトにその希望を持たせ、あてにさせておられたのだ。バルトは今日になって失格し、その失格に気もちが転倒して、これから



どうなるのかも分からずにいるのだ。ぼくはお受けしようと思う。……もしぼくが辞退したら、あとは先生になるほかはない。ぼくにはそれができない」(『ユルム街の僧院』311-312頁)。

しかし、この間のロランの実際の胸の裡は複雑であったようである。そのことは後年の内面の自伝に示されている。「ローマに行くことに私は気乗りがしていなかった」(『内面の旅路』397頁)。「私に与えられたのは私が軽蔑していたローマに行くという運命だった。エコール・ノルマルは〔ローマの〕パラッツォ・ファルネーゼの考古学院に毎年一人ずつの留学生を送っていた。そして選ばれていた候補者たちが不運にも選抜試験で失敗したために、私自身の成績によってというよりもむしろ異常な僥倖によって、お鉢が私に廻って来たのであった。……私は図々しくも、即座には諾といわなかった。いろいろな名誉賞の受賞者だった学界の老つわもの、考古学の大元帥ジョルジュ・ペロー総長は私の図々しさにひどく驚いていた。……《二つの厭なことのうち、いくらかましな方を探ろう！》地方の教職に就くことを承諾するか(ところで、教えることは私には閉口だ！)それともローマ行きか、二つに一つを選ぶ以外に道はない。そんならローマへ行くでしょう」(『内面の旅路』397-398頁)。

当時、フランスは、ローマとアテネに古典学の研究のための学院をもっていた。大学教員、研究者にとっては、とくにアグREGATIONが準義務化している最も古典的な学問分野では、アグREGJEであるだけでなく、ローマやアテネのフランス学院留学経験は、大きな影響力を有していた<sup>12)</sup>。その意味で、ロランが選ばれたことは、今後学者生活を送るつもりならば、まさに「僥倖」であったといえよう。

#### IV. 高等師範学校卒業後のロランー結びに代えて

ロランがあれほど拒絶していた教師への就任について、留学後の趨勢を明らかにすることによって結びに代えたい。「試験のためのやり甲斐のない努力が終わったあと、エコール・ノルマルと教職とのあいだで、イタリアにおける二カ年の猶予が私にあたえられたときに、学位論文の資料をあつめて、ゆっくりと大学教授の道を準備する便宜をもとめはしなかった。……そうした未来を私は少しも望んでいなかった」(『回想記』61頁)ロランであったが、当初躊躇していたローマ留学は、実際には彼にとって「夢の二年」であった。彼は、「ファルネーゼ宮殿の三階に、大使館の上に、暖房のない部屋に」(『回想記』62頁)住んだ。そのローマで、その後ロランに大きな影響を与えることになるマルヴィーグとの出会いがあった。かつて、モノーに紹介されたことのある「この親愛な友、私には第二の母であり、完全に深い愛情で、のちにはまったく無私な愛情で私を愛し、私が愛した彼女」(『回想記』78頁)に出会うことになる。また、留学中、ロランはイタリアを何度も旅した。「エコール・ノルマル留学生としての負担ーヴァティカン図書館で十六世紀のイタリアーの、読みにくい筆写草稿を判読する仕事ーからにわかには解放されて、私はその歳いっぱい大いに夢み、大いに歩きまわった！長靴の形の国の上から下まで、ヴェネチアからギルゲンティまで」(『内面の旅路』425頁)旅をして廻った。あっという間のローマでの2年間を終え、

「私はパリの闘技場に戻った。夢の歳月は終」(『回想記』107頁) わる。

いろいろな意味で、イタリア滞在に影響を受け、それを謳歌していたロランであったが、教職に就くことだけはためらいがあったようである。彼はローマ留学中から、「大学教授の道は断念して、もっぱら芸術に身をささげようと決心し」、大学と縁を切るのは自由だと思っていたのだが、「私の家族は大きな叫びを発した。そしてガブリエル・モノーに支持をとめた。律儀な彼はひどく当惑した。彼がローマ学院留学に私を選んだのだった。私に関しては彼は大学に責任があった。そして新教の規範による彼の厳格な義務観念は、エコール・ノルマル入学によって生じた十年間の教職契約の条項を終りまで果たさないということをもとめなかった」(『回想記』95-96頁)。

こうしたロランにとって予期しなかった事情、つまり、クロチルド・ブレアルとの恋愛結婚が、教職へ就くこととその準備としての博士論文の執筆を承諾させた。「私は博士論文を書かないと頑ばっていた、ところが一八九二年十月に、私の結婚がこの問題を一刀両断に解決することになった。なぜかという私の義父がきわめて賢明に、そこに提出した条件は、それを検討する決心をさせることだったからである。……一八九二年十一月に私が学位論文の資料を探るためにイタリアへ出発し」、そこで「市内の図書館を漁っているうちに、初歩から、私は金鉱を、十六世紀の末、十七世紀初めのイタリアのオペラ作家たちの音楽、詩、批評のあらゆる宝を発見した。……私の若い妻は私と同じくらい音楽家だった。私たちの愛には音楽が半ばを占めていた。……彼女は幾朝となく、私とともに図書館で過ごして楽譜を写しとった。……私はオペラに関する私の論文の資料をすっかり集めた」(『回想記』160-161頁)。ちなみに、妻クロチルドの父、ロランにとっては義父となるミシェル・ブレアルとは、コレージュ・ド・フランスの文献学教授であり、高等師範のモノーらとともに、19世紀後半以降の高等教育改革の推進者であり<sup>13)</sup>、改革の推進ロビーともなる「高等教育協会」の創設メンバーでもあった<sup>14)</sup>。

ロランはソルボンヌに、「近代抒情劇の起源ーリュリとスカラッティ以前のオペラの歴史」とラテン語の副論文「16世紀イタリア絵画の頹廃」を提出し、「論文は優秀な成績で通過し」(『回想記』185頁)、博士号が授与される。

その一つの効果は、それまでリセとセーの高等小学校で時間講師をし、「汽車の時刻表をしらべ、地方へ任命されるのを待っていた」ロランに、母校高等師範学校の芸術史の講師のポストが付与されたことであった。そして、1895年11月2日、「私は自分の母校に、卒業して六年のちに教師として戻」(『回想記』189頁)ることになる。あれほど彼自身抵抗のあった教師の道に結局は就任することになったロランは、その後パリ大学に移り、1912年まで大学教員を続けることになる。

## 注

- 1) Beauchamp, A., Recueil des Lois et Règlements sur l'Enseignement Supérieure, tome 1, 1880, pp.171-188. 帝国大学法の邦訳は、池端次郎「資料 ナポレオンの帝国大学法」(『広島商大論集』第10巻第1号、1969年)を参照。
- 2) 蛸原徳夫、波多野茂弥訳『ユルム街の僧院』(『ロマン・ロラン全集26 日記I』1982年、みすず書房、所収)。
- 3) 宮本正清訳『回想記』(『ロマン・ロラン全集17 自伝』1980年、みすず書房、所収)。
- 4) 片山敏彦訳『内面の旅路』(『ロマン・ロラン全集17 自伝』1980年、みすず書房、所収)。
- 5) 高等師範学校については、Smith, R. J., The Ecole Normale Supérieure and the Third Republic, 1982. および L'Atmosphère Politique à l'Ecole Normale Supérieure à la fin du XIX<sup>e</sup> Siècle, RHMC, tome XX, Avril-Juin, 1973.を参照。
- 6) Smith, The Ecole Normale Supérieure and the Third Republic, p.22.
- 7) Ibid., pp.23-24.
- 8) Ibid., pp.25-26.
- 9) Ibid., p.14.
- 10) Ibid., p.17.
- 11) Ibid., p.11.
- 12) Charle, C., La République des Universitaires, 1994, p.198.
- 13) Tuilier, A., Histoire de l'Université de Paris et de Sorbonne, tome 2, 1994, p.389.
- 14) 高等教育協会については、拙稿「〈研究ノート〉 第三共和政下フランスにおける大学の復活と高等教育協会－『国際教育評論』の分析を通して－」(『教育社会史研究室年報』第3号、1997年)を参照。